青山教会会報

「バベルの塔」

創世記十一章一～九節
フィリピの信徒への手紙 二章五～十一節

牧師　増田将平

「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた」。なんと素晴らしいことでしょうか。人々は塔のある町を造り始めました。一つの言葉、一つの思い、技術の進歩。理想的な明るい世界の始まりに見えます。ところがご覧になった神は言われました。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない」

一体何が問題なのでしょうか。人々の言葉が記されています。

「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」

人々には不安と恐れがありました。自分たちの力が弱くなり、失われること、散り散りになってしまうことです。けれどもこの恐れは神を畏れ敬うことに至らず、恐れに抵抗するかのように自分たちの力を大きくし、塔を建てることへと向かいました。なぜ散らされてはならないのでしょうか。天に届く塔を建てて、自分たちの名を上げるためです。かつて巨大な力を誇っていた国々、人々が見る影もなくなってしまった。そんな歴史の浮き沈みを目の当たりにしていたのかもしれません。

「有名になる」とは「名を上げる」という意味です。名誉を求めることは悪いことではありません。けれども、名誉が悪いものに変質してしまうことがあります。名誉ある地位の人が悪さをするニュースは絶えることがありません。なぜならば、名誉自体は良いものですが、人が「高慢」になるからです。自分は人よりも「高い」ところにいて、特別で力がある存在だと思い込み「自慢」する。そうなると人はどこまで高ぶるのか。

「天まで届く塔」、これが問題でした。天には神がおられると考えられていました。人間が天よりも高くなろうとする自己絶対化の罪がここに描かれているのです。

神は人間がより大きな悪を行う前に、介入することを決意します。しかし人間を滅ぼすことはしません。ノアと虹の契約を結んでおられたからです。神は言葉を混乱させられました。一つであった言葉が通じなくなり混乱が生じて建設は中止されました。

だからこそ世界には現在様々な言葉があるのだと告げているように読めます。これは不思議に思えることの原因を物語る昔話の一つのように思えます。しかし、この話が言いたいことはそうではないのです。

普通「言葉が通じない」のは言語の違いが原因として考えられます。それなら同じ言語を話している人同士であれば言葉が通じるかというとそうではありません。会社の会議、マンションの管理組合の会合、夫婦の会話などで、

「あの人が言っていることはわからない」という場面があります。同じ日本語を話しているのに通じない。一つになることができずバラバラになってしまう。

問題は言語ではないでしょう。自分を高いところに置き、まるで神であるかのように振る舞う高慢の罪が問題なのです。ある人が言っています。「なぜ言葉が通じないのか。聖書は、神のようになろうとする高慢に対する、神の裁きの結果であると告げているのです」。神のようになるために神に近づこうとした人間が、神の前から散らされ遠ざけられたのです。

しかし、神は再び天から降ってこられたことを聖書は告げます。今度は散らすためではなく、集めるためです。

それが今朝の新約聖書の言葉です。「バベルの塔」は人が天にまで登ろうとした話ですが、神はバベルの話と全く逆のことをなさいました。

キリストは神であり、天におられる方であるのに、地上に降りてこられました。まことの神である方がまことの人になられました。私どもと同じ肉体を持ち、肉体の弱さを知っておられました。地上のご生涯の最後には十字架につけられました。

「神と等しい者であることに固執しようとは思わず、自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました」。神であるお方が、神であることを捨て、制限して、人間になられました。ご自身の神の栄光、神の立場を捨てられました。

私どもが最も嫌うことは、自分の立場を捨てることです。自分が格下に位置付けられることです。ところがキリストは誰からも強いられることはない、神であられ、あらゆる恐れと関わりのない完全な自由の中にありながらも、ご自分が神であることに固執せずに、人となり、しかも一国の王子ではなく「僕」となりました。僕とは、奴隷のことです。主人に仕える者です。私どもは仕えることよりも、仕えられることを求めます。けれども主イエス・キリストは、自ら進んで父なる神に仕え、私どもに仕えてくださった。それも死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。ご自身の命を投げ出して仕えてくださった。

十字架につけられた死刑囚は高く掲げられました。多くの人目にさらされるためです。その意味で十字架とはこの世界の最も低いところです。天から降った方は、最も低いところに降りてこられたのです。人々を散らしてしまうものが私どもの中にあります。少しでも自分が上に立とうとする罪、神のようになろうとする罪があります。

十字架についた神の子は私どもに与えられた赦しの根拠です。十字架につけられ、復活されたキリストは、神から私どもへの愛の言葉です。父なる神は散らされていた者たちを集めてくださった。それが教会です。教会で人は神からの語りかけを聞くことができます。だから教会は十字架を最も高いところに揚げるのです。私どもの会堂建築への歩みもこのためにあります。

教会は主の祈りで「み名を崇めさせたまえ」と祈ります。私どもではなく、神の名、神ご自身だけが高められますようにという祈りです。この祈りを祈ることで、私どもは、バベルの塔から降りることができるようになります。神のみ名が高められることを喜びとして生き始めるのです。（八月十二日主日礼拝説教要旨）

— ご案内 —

創立記念
特別伝道礼拝
説教
大橋新牧師
（浜北教会）
11月4日10:30
礼拝後、大橋牧師の講演があります。